

# 末黒野

すぐろの

7月号

(通巻911号)



## 紫木蓮

森清堯

山裾の動く気配や露の臺  
挨拶のまこと短き初音かな  
一列の白に一樹や紫木蓮  
ととのはぬ野の草の丈初蝶来  
代替りすすむ堤の桜かな  
薄うすと掘割の空花ふぶく  
気まぐれの野風黄蝶を攫ひけり  
四合瓶四隅に置きて花筵  
堀割の返照に揺れ糸柳  
ひと畝のほつたらかしや葱坊主  
小綬鶏や杜の奥より巫女ふたり  
ペン先にとどめてをりぬ春日影

## 座禅草

岡野里子

捨畑の露のしゅうとめ彩失せず  
草萌や一枚石の橋のきは  
草庵の葩の木目沈丁花  
池の辺の古りたる木椅子緑立つ  
降り頻る鳥の喃語や花きぶし  
溪川の修羅へ火の色落椿  
湧水のささめき抱き座禅草  
下馬の碑や馬酔木の房の五六寸  
深更の軒端うつ音花の雨  
花満ちてうらみの雨のひと日かな  
松の芯朝の光に寸もたげ  
花曇コンロの着火ままならず

朧夜

黒滝志麻子

(顧問)

鶯ややしるに伝ふ力石  
 酒蔵の香の残りをり燕の巢  
 朝月やほろとこぼるる紫木蓮  
 手漕ぎ舟音軽々と朧の夜  
 直線も曲線も好きつばくらめ  
 山一つ公園と言ふ桜どき  
 山の辺の道を抜けきて春惜しむ  
 水の面に鳥の声紋桜草

甲矢集

芽吹山

森清信子

ものの芽を育む雨となりにけり  
 薄ら日にすがりて満ちぬ藪椿  
 流水を波の攫ひぬつばくらめ  
 蒼天や上枝触れ合ふ芽吹山  
 雨あとの朝日にこぼれ雪柳  
 里にもう頼る兄なし紫木蓮  
 池に向く園の茶店や桜餅  
 風を呼び風のとりこの落花かな  
 学習田谷戸を気ままの昼蛙  
 細波の寄せては返し春愁

踏青

石黒興平

久々の句座の和める初音かな  
 踏青や海見下ろせる所まで  
 うららかや不要不急の外出好き  
 春眠の夢途切れたり震度四  
 村おこしの頼みの枝垂桜かな  
 切株にワイングラスの花見かな  
 ウクライナへの献花に春を束ねをり  
 伏目な白衣観斤花の雲  
 散り初むる薄墨桜翳連れて  
 日面の落花ひかりとなりけり

# 孫の婚

菅野日出子

歩数計の進む日和や花ミモザ  
子にたよる夜更の地震や冴返る  
白き髪ふゆる植木屋彼岸寒  
亡き夫との旅の計画四月馬鹿  
きさらぎや柳行季に妣の帯  
春昼や夢にいざなふ万華鏡  
瀧桜今満開と里の寺  
孫の婚ととのふ知らせ桃の花  
ケアセンターへ廻り道して飛花落花  
鴉来て囀る二羽の飛びたてり

# 植田

田中臥石

立春の麴の匂ふ蔵の径  
青木重行忌や桜のいま咲けり  
五月来と思ふ丁雨忌栗国忌  
一吐思ふ紫陽花蕾出す  
浜に佇つ松魚不漁のいさば跡  
かんぱちの漁師ぼつりとけふもダメ  
九十九里浜やいさばの閑古鳥  
畦の隅ひとかたまりの早苗束  
田植いまさかりや畦に海ひびく  
夕日影植田の水に海ひびく

# 乙矢集

配列は音順、月毎の循環



桜散る

今村千年

春眠のただ中にあり猫な鳴きそ  
春風をありたけ入れてひとり部屋  
野に出れば日なが一日と見こう見  
杖一本の風流人や花の茶屋  
頻りなる桜しべ降る化粧坂  
都筑向く防人の歌碑飛花落花  
桜散るひとり住ひの母訪はな

踏 青

池乗恵美子

紅梅の蕊はつらつと馥郁と  
暮れ残る空の青さや丁字の香  
初花の空あたらしき朝かな  
はらかならの同じ笑窪や初桜  
一陣の一樹繚乱紅枝  
母の忌の大慈大悲の桜かな  
踏青や緊りなき影遊ばせて

養 花 天

大川暉美

風光る波の研ぎゆく海石かな  
遠くへと吹く子追ふ子やしやぼん玉  
故郷の木の香木の色春深む  
飛行機の声のみ残し養花天  
花冷えや灯る屋形へ糸の雨  
街道は風の抜け道飛花落花  
桜糞降る払暁の大社

蝶

太田良一

入れ替はる夢を枕の朝寝かな  
風船を追うて参詣段葛  
売れ残る墓地の一角春の蝶  
日時計へ蝶の集まる亭午かな  
汽笛より入る港や蜃気楼  
ぬるき茶のぬるき会話や春惜しむ  
千尋の谷を埋めたる桜かな

浅

春

加藤静江

浅春や融け合ふ空と水平線  
芽柳や風に光を散らしをり  
波白きこゆるぎの磯桜東風  
ゆるやかに砂を糝すや春の潮  
ゆつたりと曲りてゆけり花筏  
桜蕊校庭に降る静寂かな  
山裾に育つ鬪鶏のびやかに

蝻の道

岡田史女

打ち返す土の湿りやげんげ草  
いきいきと田水の走り山桜  
廻らざる水車へ桜吹雪かな  
菜園の昼のしづもり葱坊主  
蝻の道山家へ続く小流れに  
蒼穹へ吸ひこまれたる雲雀かな  
夜桜や闇を抜けゆく貨車の音

強

肴

小田嶋野笛

遅き春ゆると解けゆく紅茶の葉  
三分の春愁つもる砂時計  
吾が庭の百の碧玉名草の芽  
男の子なる隣の産子初桜  
闌の宴の蛤強肴  
酒屋や友と出くはす三軒目  
ひとりの窓へ万のつぶやき春の雨

清

明

高木邦雄

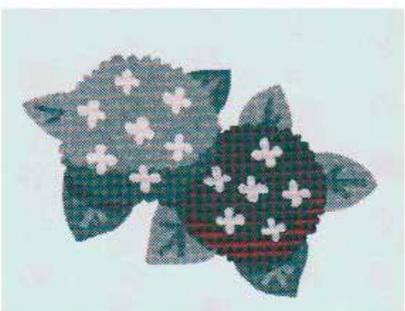
金沢区瀬戸神社

仇討を伝ふる社花吹雪  
清明の風のキャンパス聖母像  
朝掘りの筍飯やてんこ盛り  
朝風や桜葉ふる九段坂  
落合ひて渦巻き初むや花筏  
蘆牙の群る水底雑魚の影  
老農の畑鋤き終ふる穀雨かな

母の文

長尾夕

半仙戯くり返し読む母の文  
ハードルの越せぬ歳月鳥帰る  
春田打つ老いの背中に風のむち  
種下し代田に揺らぐ雲一朵  
ランナーの折り返し点土筆摘む  
夕仕度土筆の袴ねんごろに  
隠沼の一筋の水脈残る鴨



# 青炎集

## 森清 堯選

川崎 滋野 暁

だるまさんがころんだ梅の花の下の  
条幅の書線の震へ凍返る  
太郎賞の現代アート春一番  
鶯の初音や書体整はず  
見通せる玻璃の茶室や春の色  
動物園に長き列なり花曇

横浜 布施由岐子

横浜 田中春江

瓦礫の街を思ふ節電冴返る  
はるかぜよ彼の心を解かせるや  
耕人の一人二人と影増えて  
五合目や上に残雪下に雲  
リハビリのあとの歩幅や花見鳥  
騙されぬ騙さぬ無聊四月馬鹿

大網白里 亀卦川菊枝

横浜 滝沢いみ子

マスクして黙の行き交ふ花の道  
潮香る峠の桜月夜かな  
春の月草に沈める雲の影  
蕉門の蛙夜つびて詩合戦  
鮎パンの臍の桜や春うらら  
海風を溜めて青あを苗代田

せせらぎや鶯笛を一人吹き  
茹で芹やざくつざくつと緑切る  
子の代の書肆や燕の来てをりぬ  
山桜奥へ奥へと咲きにけり  
花の蜜吸ひつつ栗鼠の枝渡り  
自転車の通学の夢花の道

横浜 加藤直人

横浜 平木三恵子

虎杖や路傍の力漲りて  
花びらに混りて散りぬ蝶の羽  
鳥の群れ名に大漁を付す桜  
満開は傘も同じや花の雨  
桜蝦干し場に仰ぐ富士の空  
羊朶の葉を羽箒とせり松露掻き

シャネルめく神戸の市章山笑ふ  
時刻む土の鼓動や花菜畑  
鞆や空押し上ぐるスニーカー  
初恋は淡き虹色石鹼玉  
ゆるゆると伸ぶる赤子や春の朝  
黒板の桜と祝辞入学児

横浜 和田慈子

横浜 川西栄江

切りのなきワクチン接種春北風  
全山を包む梅の香臨時バス  
海に向く車窓や吊し雛飾  
足弱の夫に替はりぬ彼岸寺  
風一陣春の落葉の音立てて  
廃校に残る記念樹百千鳥

踏み石は三溪好み露地芽吹く  
迫り出せる木五倍子の花や夕日影  
桜散る風をいなせる丘の上  
ひとり来て落花の贅の中に居り  
吹き溜まる落花の温み掬ひけり  
子雀のふつと降り立つ手水鉢

相模原 板谷俊武

三鷹 小林清彦

北信の季の遅さや路の臺  
朱の映ゆる稲荷の鳥居雪柳  
きのみ摘む軍手要らずの下山道  
三世代の通ひし校舎花の門  
一花また一花を積みて花水木  
研ぎ上げし出刃を頼みの鱈かな

雛は眼を据えしままなり子は親に  
雪解や星の瞬く水鏡  
卒業子背にさよならを纏ひつつ  
恨みごと曖に曖に川さず落椿  
花曇逢ひたき人は居なぬ人  
在りし日を揺らせる風や山桜

# 耕 土 集

## 岡野 里子 選

君子蘭濃かり朱色に薄く元氣  
何気無く仰ぐ朝日や花の雲  
耳なりの時に高なり鐘おぼろ  
春の水さらさらゆくよ畦に沿ひ  
**春光の動き捉へて鷺動き**

横浜 白居 澄子

春の日はづむ心の出合ひかな  
蓬餅素焼の皿へ色あふれ  
そよ風や花びら散らし香をとどけ  
**風光るエイトの舵手の黒き腕**  
夕照に光る額や春田打ち

横浜 久島しんの

**沓音の袴姿やつくしんぼ**  
凛春のあやしき雲動き  
花柄のエプロン欲る児木瓜の花  
夕風や手招き続く雪柳  
満開の花やベンチの新しく

横浜 平野 秀子

文学館へ誘ふ道やチューリップ  
口遊ぶ歌碑の調べや花は葉に  
結界の奥に鶯異人墓地  
竹の子のひかり包みぬ新聞紙  
**新しき靴のよちよち青き踏む**

横浜 森川 享

草萌や野に腹這ひて遠き富士  
菜の花や対岸に黄の一文字  
八重桜満つる街路や子等の声  
**里山の多弁となりて木の芽時**  
青空や松の緑の男前

横浜 西 計郎

日溜りの千の星屑犬ふぐり  
菜の花やメンバー揃ふ草野球  
**ほつかりと雲を纏ひて山笑ふ**  
満潮の川を占めたり花筏  
春昼や海辺の町の静けさよ

横浜 鈴木 英雄

自転車の父子の健脚夏隣  
花冷や悔いを流せる仕舞風呂  
**紅椿きらりと土へ雨の中**  
八幡の花の参道帽を手に  
夕暮や桜に止まる車椅子

横浜 佐藤 勝代

雪代の光届かず暮るるるなり  
受験子や等身大の宿選び  
うららかや見知らぬ犬になつかれて  
総身に纏うて帰り杉花粉  
**春暖や和室の壁のゴッホの絵**

横浜 三浦千恵子

**散りしきる花の下なり義士の墓**  
万愚節を知り得し外は雨しとど  
辛党が桜か草で迷ひけり  
朝まだき子雀襲ふ鳥かな  
おやすみと言へる幸せ春の月

横浜 杉山 善信

春炬燵にこくりこくりの留守居かな  
本好きのはにかみ屋の子卒業す  
**福分けの良き食べ頃や伊予蜜柑**  
鯁焚く銀鱗はじく夕厨  
一塩の鰯干す籠春日差

横浜 平田 きみ

指先の泥よ青さよ路の臺  
春灯一筆箋のふみ長き  
ひしめきて夕べの空へ白木蓮  
**風にのる里の声あり初蛙**  
野遊びや色とりどりの子の帽子

横浜 廣部 尚美

孫来たり通知簿見せに春休み  
卵とぢの引き立つ青き蕨かな  
上弦の朧月夜や庭に立ち  
春風や歩幅の狭くなりし吾  
**八重桜病む膝庇ひ礎のぼり**

横浜 大庭美智代

コンサートへ行けぬままなり春セーター  
春日和ガラス戸越しの空の青  
受験子の吉報待つや日曜日  
杉花粉目に見えねども知るまぶた  
重たげやぼとりと八重の落椿

横浜 宮崎 浩美

トンネルに雪の警告寒戻り  
木々の間の早も満開花辛夷  
貝母咲くやさしき姉の細き指  
学校の背負ふ裏山山桜  
美術館出で公園の花見かな

横浜 村田 敦子

のどけしや富士山見ゆる友の部屋  
友転居桜葉降る日の朝に  
春愁や春暖の差に追いつけず  
再会をリラの花咲く道に待ち  
花曇テイサービスの送迎車

横浜 毛利 直子